

# Prognosis of Implants with Implant-Supported Fixed Dental Prostheses in the Elderly Population: A Retrospective Study with a 5- to 10-Year Follow-Up

西岡（高橋）， 智世

<https://hdl.handle.net/2324/6787515>

---

出版情報 : Kyushu University, 2022, 博士（歯学）, 課程博士  
バージョン :

権利関係 : © 2022 by the authors. Licensee MDPI, Basel, Switzerland. This article is an open access article distributed under the terms and conditions of the Creative Commons Attribution (CC BY) license.



氏 名 : 西 岡 (高 橋) 智 世

論 文 名 : Prognosis of Implants with Implant-Supported Fixed Dental Prostheses  
in the Elderly Population: A Retrospective Study  
with a 5- to 10-Year Follow-Up

(高齢者患者群におけるインプラント支持固定歯科補綴装置を用いた  
インプラントの予後:5 年から 10 年の追跡調査による後ろ向き研究)

区 分 : 甲

### 論 文 内 容 の 要 旨

日本は、2007 年に超高齢社会を迎え、その後も 65 歳以上の高齢者の割合は増加し続けている。高齢者の歯の欠損に対する歯科治療の需要が高まる中、インプラント治療は欠損補綴治療の選択肢の一つとしてその地位を確立し、口腔機能や審美性の低下に対する有効性が示されている。老化は全身および口腔内の健康に一定の影響があると考えられているが、老化そのものがインプラント治療とその予後に影響する可能性は低いことが示唆されてきた。その一方で、老化に起因する全身疾患および口腔衛生管理能低下によるインプラント周囲組織の炎症は、インプラントの予後に対してリスクとなりうる。さらに高齢者においては、インプラント治療終了後のメンテナンスに通うことが困難になる潜在的なリスクについても考慮しなければならない。しかしながら、高齢者の患者においてインプラント喪失の原因や喪失後の対応に関しての報告は未だ不十分である。インプラントを長期的に維持していくためには、これらの現状の調査は有益であると考えた。そこで本研究では、65 歳以上の高齢者に装着されたインプラント支持性固定性補綴装置 (ISFDP) においてインプラントの生存率と喪失原因、喪失後の対応を後ろ向き研究で調査することを目的とした。

本研究は、九州大学病院において 2009 年 10 月から 2020 年 3 月までの期間に ISFDP を装着した 65 歳以上の患者を対象とした。対象患者は ISFDP 装着後少なくとも 5 年間経過した患者としたが、5 年以内にインプラントを喪失した患者は分析対象とした。インプラントオーバーデンチャー (IOD) などのインプラント支持型可撤性補綴装置で治療された患者は研究から除外した。

患者のカルテから①ISFDP 装着時 (ベースライン) の年齢、②性別、③インプラントの本数、④ISFDP のユニット数、⑤インプラント埋入部位、⑥上部構造固定様式、⑦ISFDP の材質を抽出した。生存期間は、最終上部構造である ISFDP が装着されてからインプラントが失われるまでの期間と定義し、5 年生存率と 10 年までの累積生存率を算出した。インプラント喪失患者においては上記情報に加え、インプラントの喪失後の対応を検証した。また、補綴装置を変更した患者も併せて抽出した。

全体で 195 人の患者 (平均年齢:  $70.1 \pm 4.5$  歳) に埋入された 687 本のインプラント (287 装置の ISFDP) が対象となった。インプラントの 5 年生存率は 99.0%、10 年累積生存率は 98.1%であった。喪失した 11 本のインプラントのうち 7 本は、インプラント周囲炎が原因であった。インプラントを喪失した患者で、再度インプラントを埋入された患者は、2 人 (3 本のインプラント) であった。他の 8 人の患者では、補綴装置の改変など非侵襲的に対応されていた。また、2 人の患者は ISFDP から IOD へ変更されていたが、インプラントの喪失が原因ではなかった。

本研究では、ISFDPを装着した65歳以上の患者では、インプラントの高い生存率が観察され、インプラント喪失後の補綴治療では非侵襲的手技が多く適用されていることが明らかになった